

福住と水

福住は水であふれている。幼いころ、近所を散歩していたときに純粋にそう思ったことを鮮明に覚えている。家の池には鯉がいて、向かいの田んぼの水が輝き、少し歩いたところにある川は黒くて大きな岩があつて透明な水が勢いよく流れている。川の水は冷たくて小魚もいきいきと泳ぎ水を通して生命を感じられた気がした。豊かな水を見ると、小学校で学習した水にまつわる伝説を思い出す。今から千三百年ほど昔、天武天皇が伊勢神宮を参詣するため福住を通られたときのことだ。なだらかな道をしばらく行くと美しい池が目の前に広がっていた。天皇はその氷を笏で指して家来に感動を伝えたため、「笏指池」と呼ばれるようになった。

私はその話を聞いたとき、普段からたくなの美しいものを見てきた天皇が感動するな

天理市立福住中学校 三年

岡本 珠希

なんて、どれほど綺麗な池だったのだろう：と天皇の見た池に思いをはせた。だが、今ではこの池は一面に水草が生い茂り、面積もかなり小さくなっているらしい。千三百年の時を経て、その間にたくさんのお出来事があつたので、一がいに悪いとはいえないが、天皇が感心された由緒ある池を後生まで残そうという気持ちを持った人がいなかっただのか、と疑問に思った。だが、この無関心は今の私たちに充分ありうる。人々が生活している中で環境問題を重んじる人が減少すると今は澄んでいる水もどんどん汚れていく。それを時のせいにはせず、今の環境を維持し、よりよくするための対策と努力が必要だということを「笏指池」は教えてくれている気がした。

地球は水の惑星と呼ばれているが、私たちが比較的簡単に利用できる水は全体の○・○

一パーセントでしかないらしい。私はこのことを知ったとき、すごく驚いた。心のどこかで水の有限性を否定していたからだと思う。海水を淡水に変える技術がなかった時代は、その○。○一パーセントをめぐる争って

いたと思うと、今の私達がどれだけ幸せか、どれだけ先人達の知恵と努力に助けられているのかが分かった気がした。昔と今の価値観は違うのに、今も昔も変わらず水は大切なものとして受け継がれているということは本当にすごいことだと思う。

さらに、世界人口の約十三パーセントに相当する人々が安全な飲料水を利用できず、約三十九パーセントの人が基礎的な衛生施設を利用できないそうだ。日本人は安全な水をいつでも利用できる。この差はおかしいと思つた。その水を無駄遣いするという行為は、水にも安全な水を利用できない人に対しても失礼なことではないか。日本では蛇口をひねれば水が出てくる。川には水が流れている。これらの風景が当たり前だと思つているところが無関心につながっているのだと思う。水のおかげで私達は農業ができて料理が作れて生

活ができていゝる。私達は水によつて生かされていゝるのだ。そのことをしつかりと心に留めて生活することが水が簡単につかえる地域の使命なのではないか。

私の住んでいる村は、稲作が盛んで、水を使った祭りを行つたり、夏休みにクリンキヤンペーンを行つて川付近のごみを拾つたり水と向き合う機会に恵まれている。一人一人が心の底から水の大切さを実感することも必要だと思ふが、地域の行事などを通して水への感謝の気持ちを確認できる機会をつくることもいいのではないかは、と私は思う。今日も福住には池があり、田んぼがあり、川がある。だが、水の恩恵を自覚した今では、いつもの景色が以前より輝いて見えた。